

1 開会

2 全体協議（石井コーディネーター）前半

（石井コーディネーター）

本日は全4回のうちの2回目ということで、今日から本格的に進めていくことになる。できたら最後には意見がまとまるといいが、参加者のみなさんには、今後の中学生にどのような環境を、この市として用意してあげた方がよいかというアイデアを、極端なものも含めて自由になるべくたくさん出してほしい。アイデアをいただく方法は発言することだけでなく、改善提案シートに書き出してもらうという方法もある。紙はいくらでもあるので、なるべくたくさんアイデアを出してほしい。

【改善提案シートの書き方(ルール)について。】

例として、シートの上部に「公園が利用されていない」という課題が書いてある。「平日ガラガラで利用されていない」と思う人にとっては、「もっといろいろな人に利用してほしい」ということが課題だが、「子供がいると自分が利用するのに邪魔だ」と思う人にとっては、「公園が利用されていない」ことは課題にはなり得ない。このように、自分が課題だと考える事について、どうやったら解決できるのかというアイデアをセットにして書いて欲しい。アイデアは、個人、地域、行政、その他の主体それぞれでできることを分けて書いてもらいたい。

まずは前回欠席の方の自己紹介をお願いしたい。自己紹介の内容は前回と同じく名前、お住まいの地域、南陽市歴、どんな人か(職業や趣味など)、テーマについての一言、参加動機。

～自己紹介～

（石井コーディネーター）

皆さんの話を聞けば聞くほど色々な方がいて、色々な意見が出るという強みがあると思うが、その分、中学校の現状についてそれぞれの知っていることや理解度に差があると感じた。前半では、昔と今の中学校の違いを、生徒数以外の中身として体制や生徒児童の様子も含めて皆さんで共有しながら意見をいただいきたい。前回の議論の概要を大きく5点に分けて整理した。その中で、前回の冒頭に部活の話が出て、やっぱり部活の中で児童が成長するのはあるんじゃないかという話があったので、最初に部活の様子から話をしていこうと思ったので、教育委員会の担当者から話をしてもらう。それをベースに、議論を進めていこうと思う。

（学校教育課長）

※関連ファイル「② 02 南陽市における部活動改革の進捗状況」参照

現在の部活動の状況ということで、資料に沿って現状をお話させていただこうと思う。昨今、部活動改革ということがよく報道等で皆さん聞かれることが多くなってきたのかなというふうに思うが、この部活動改革というのがなぜ始まったのかというと、元々は国、スポーツ庁、それを受けた山形県が、部活動に関す

るガイドラインを示している。そのガイドラインには、学校部活動の将来像として、生徒にとって望ましいスポーツ文化芸術環境を構築していくこと、教職員の働き方改革を推進していくことの両立を目指すということで、令和5年度から3年間を、この推進期間ということで設定されている。南陽市としても、そのガイドラインに沿って部活動改革を進めているところ。将来にわたって子供たちがスポーツや文化芸術に継続して親しむことができる機会環境を確保していこうということで検討委員会を立ち上げ、議論を重ね、実践を重ねている。この実践の中で国から実証検証事業ということで、委託を受け、南陽市として取り組んでいる。現在、議論されているのは、休日の部活動について。生徒数の減少、少子化ということで、そもそもこのスポーツや文化芸術環境は、従来のやり方、枠組みを見直さなきゃいけない状況に来ており、競技人口も減っているということが、各競技団体で言われている。そこで教育的な意義を踏まえつつも、部活動に対する考え方もアップデートして、生徒にとって望ましい環境を整えていく必要があるということで考えている。現在、市内3中学校は、部活動は任意加入制度をとっている。現状市内の中学生の様子は、学校の部活動だけに所属している生徒、学校の部活動と併せて地域のクラブに所属している生徒、学校の部活動には所属せず、地域のクラブに所属している生徒、いずれのものにも所属しない生徒がいる中で、部活動全体の加入率は85%になっている。昨年度の新人戦の段階で、資料にある競技それから文化芸術活動が部活動として設置されているが、黒い三角の印がついているところが状況、生徒数の減少に伴い、休部または廃部せざるを得なくなっている。黒丸は、単独チームでは、中体連の大会に出場できないために、合同のチームを編成して、大会に参加したという部活。令和5年度の新人戦では野球ソフトボールが沖郷中、宮内中の合同チームで大会に参加し、宮内中学校の柔道部が入るというような状況になっていた。今年度の新人戦では、野球それからソフトボール、サッカー、バレーボールにおいて合同の部活動を編成しなければならない所ができています。それから宮内中学校の剣道、柔道は休廃部の対応になっている。柔道競技では、クラブチーム例えば宮内中学校の授業がないが、地域クラブのところ星印があり、柔道部がないが、柔道がやりたい宮内中学校の在籍で柔道をやりたいという生徒が地域クラブとして大会に参加した。また同じく柔道競技だが、通常平日は吹奏楽部に所属していながら、この柔道のクラブチームに所属して、柔道の中体連の大会に個人戦で出場したというようなことがあった。このように設置されている競技ばかりでなく、例えば部活に所属していない生徒はダンスや新体操、バトミントンなど、本市の中学校に設置されていない競技をやりたいということで、そちらのクラブチームに行っている生徒もいる。やりたいものが多様になってきて、そういったものを選択できる環境を整えなければならないというような状況。今年度実証検証事業として、このようなことに取り組んでいる。地域スポーツクラブ体制整備モデル中学校ということで、この先ほどの表の星印のところ、ここに示した団体の皆さん、交渉等の皆さんがクラブチームとして手を挙げていただいて、実証検証を進めている。部活動の種目ではない、例えばカローリングであったり、コンディショニングであったりも手を挙げていただいているところ。この取り組みの課題となるところは、多様な選択肢はできつつありますが、まだまだ受け皿となりうる場所を拡充していく必要があるかなというところ。それから、部活動ではないところで活動するという意味で、受益者、保護者の方の負担も一定程度発生するということは想定される。そちらの理解を促進していくということ、施設利用の指導者への報酬等で事業の予算財源等が課題となっている。どのぐらいのことが課題解決できるのかということの実証検証を続けているような状況。

(石井コーディネーター)

今749人いる生徒が10年後には539人で3割程度減り、部活動が成り立たなくなるかもしれない。その

一方で中学生にとっての部活動は、好きなことをやったり、人間関係の中で成長していく場にもなるものである。そういった中で、部活動の現状はどうなのかというところで話をさせていただいた。この話を聞いて、自分が中学生の時や、自分の子供の時と比べてとか、何か思ったことはあるか。

(委員自由発言)

自分は今高校生で、中学校の頃柔道部だったが、自分が最後の部員だった。自分の卒業に合わせて部活もなくなった。

(石井コーディネーター)

最後の時は、部活はあるが、あんまり仲間がたくさんいない状況だったということか。後輩は何人くらいいたのか。

(同上委員自由発言)

自分の時は、同級生も後輩もいなかった。

(石井コーディネーター)

こういった形で、徐々に全体数の減少か、競技人口の減少か、部活動がなくなっている状況なのだと思う。好きなことをやれば学校は関係ないという人もいるし、学校の部活でやるのが大事という人もいると思う。中学生にとっての部活とはどういうものだと思うか。

(委員自由発言)

団体競技は人との繋がり、コミュニケーションを取るのに非常に有効だと思う。一方、いじめの温床になったりする面もあり難しいなと思う。昔はそういった面がクローズアップされず、強制的に参加するような形だった。

(委員自由発言)

今の子供たちはコミュニケーション力は減っていると思う。データ上は婚姻率は変わらないらしいが、結婚するまでに若者たちは自分が動けない。自分はプロポーズは男がするものだという世代だった。子供は自分から歩み寄れず、マッチングアプリを使わないと人と接せない。相手を探せないというのが問題なのかなと思う。部活だけでなく、学校の場でも友達付き合いができてる人は世の中にでもできていると思う。社会人になって、自分の会社にもいるが、挨拶だけしてその他のことは話さなかったり、挨拶すらしない人もいる。飲食店で「ごちそうさま」っていうのはおかしいのではという若者もいるという話を聞き驚いた。やっぱり部活動でも学校でも挨拶は普通にすることが、日本の伝統で文化である。コミュニケーション力が下がっている気がする。

(委員自由発言)

部活に入らない場合、先輩との繋がりがあったのだろうか。卒業しても、外に出て行っても、戻ってきたときに地域で活躍している先輩がいたら繋がりができる。同級生は、よほど仲が悪くなければ、良くも悪くも繋がりが持てる。

(委員自由発言)

共感できる。50年前の学校での話だが、先生や仲間がいて、今もまた戻ってきて顔を合わせようという関係が続いている。30年前の子供の部活の親同士の繋がりもある。担任の先生よりも部活の顧問の先生の繋がりが強かったり、同じクラスの保護者よりも同じ部活の保護者の方がより結びつきが強固というイメージ。関係性が変わってきているんだなと感じる。

(委員自由発言)

自分も共感できる。部活動の審判をお願いされていったら、子供たちは先輩や昔教わった先生のところに寄っていく。他の学校のライバルとも仲良くしている。私は高校生の時、1学年200人くらいだったが、同級生はクラスメイトしか分からない。でも、部活に行けば先輩も後輩も分かる。就職してから繋がる。部活は何をしていたかを聞いて、帰宅部だと言われたら会話が終わる。野球部でしたっていうとどこ守っていたのという話になる。

(石井コーディネーター)

ここでシートの考え方に戻ると、コミュニケーション力が下がっている、今もそういった関係が欲しいというのであれば、どうしたらそれを用意できるか、提供できるかということも併せて考えて欲しい。

(委員自由発言)

自分の子供が小学生の頃、学年の縦割りで行事をしていた。上級生が下級生をまとめるということをして、そういう関係性を作っていた。やっぱりそういう関係が大切だと思う。

(学校教育課長)

今も縦割り活動ということで、6年生から1年までの班を作り、清掃やレクリエーションをやっている学校が多い。小さい学校はそれが日常なので、朝の会からやっている学校もある。南陽市は小学校と中学校、幼保と小学校の繋がりもあるので、ずっとお世話される側でなく、年長さんをお迎えして世話をし、異年齢との関わりを幼保小中一貫して行うことを意識してやっている。

(石井コーディネーター)

意識的にやるというのは、少子化で子どもが減っているだけでなく、兄弟も減って、放っておくと異年齢の繋がりがなくなるということがあるので、そういう仕掛けを教育委員会でしているということか。

(学校教育課長)

学習指導要領で特別活動として異学年の交流というものが示されていることもあるが、南陽市に合ったやり方として地域の方等に協力いただいて積極的に取り入れている。

(委員自由発言)

運動会や体育祭でみんなで協力して成し遂げるのを見て、小学生は憧れたりする。今はその体育祭にかけ

る時間が減ってきている。体育祭は面倒くさい、ない方がいいと思っている子供たちが増えているのかなと思う。体育祭も部活動と併せて貴重な体験だと思う。

(委員自由発言)

今自分は高校生だが、自分の中学校は、そもそも体育祭がなかった。その中で、生徒会執行部で体育祭をしようと決めたが、コロナで中止になってしまった。自分としてはやりたい気持ちはなくなっていないと思う。

(石井コーディネーター)

今の高校生はコロナの時期と中学生の時期が被った世代なので、ちょっと特殊かもしれない。

(学校教育課長)

南陽市で幼保小中一貫教育を推進している意図の1つにモデリングの効果がある。高学年や中学生のようになりたいなという存在になれているか、といったような形で日常の生活で手本を見せるということを強く進めている。体育祭も、先生が決めたものだけでなく、生徒が自分で企画運営するという学校もある。体育祭にかける時間が減ったかということについては、教職員の時間外や課題によってバランスをとって決めている。子供の成長のために限られた時間でどういう行事ができるか考えているので、多く削っているという感覚はない。これは市内のどこの学校もそうだなと思っている。

(石井コーディネーター)

2つ目に考えていたテーマの説明に進みたい。

前回、学校の環境に耐えられないときに、それを避けて別の道に進むというのもありなのではないかという話があった。そういったときに相談できる場所がないという意見もあったので、その現状を説明していただく。また、いずれ中学生も違う社会に出て行く時に、どういうステップを踏むのがよいのか、そういったギャップについて説明していただく。

(学校教育課長)

※関連ファイル「② 03 COCOLO プランリーフレット」参照

幼保小中教育について説明する。どうしても教員は目の前の子供の学年の成長を担当していて輪切りになっていた。南陽市では、年中の段階から中学を卒業する時を目指して、その段階での学びがどうつながっていくか、その連続性を意識して教育に当たっている。ギャップをなくすことはできないかなと思うので、それを力強くみんなで一緒に登っていくことを目指して取り組んでいるのが、幼保小中一貫。市内の中学校の先生からは、「15歳の春は目指しておらず、18歳、社会に出る冬ぐらいをイメージしている」ということを、指摘されたことがあった。目の前の子供たちの将来を見据えて、今どんなことをしなきゃいけないか、力をつけなきゃいけないかということを考えて、進めているのが小中一貫教育。不登校の話も前回あったが、文部科学省が出している、なかなか学校に足が向かない生徒のための計画に基づき、南陽市でも幼保小中一貫教育の中で、切れ目ない支援をしている。南陽市に適した部分、南陽市だから難しい部分もあるので、南陽市に合った部分で取り組んでいる。例えば、行政と民間で共有してなかなか学校に足が向かない生徒が、どこで学ぶのがいいのかを考え、学ぶ場を設けている。隣の上山市では、学び

の多様性を確保するため不登校特例校を設置するということがニュースになっているが、なかなか学校に足が向かない人の学びの場の一つとしてそういうものもある。南陽市としては、一か所に不登校の生徒を集めるというよりも、1人1人に合った対応がないかということで進めている。例えば、教室には入れないけども学校に来ることができたり、学校の中で教室じゃない場所で学ぶってということであったり、家から外には出られるけども学校じゃない場所が良い人は、教育支援センターに行くというような形をとっている。相談室を設置して、そこで学んでいたり、民間で居場所を作っている所で学びたいとという人もいる。多様な選択肢を設けて、そこに生徒が自ら選んでいっている状況。また、家から外に出ることが難しい生徒は、タブレット端末によるオンラインでのやり取りや、南陽市で設置しているスクールソーシャルワーカーが家庭訪問をしたりと、その生徒に合った対応を取っている。家から出られなかった生徒がそういう多様な場に行って、自分の力を発揮してみようという、自分の状況を肯定しているケースが増えてきているなど感じる。不登校は、しばらく前は高学年になるほど、中学校に行くほど、増えるという状況にあったが、その要因としては学力不振であったり、人間関係の課題であったりというようなことが多かった。しかし現在は、小学校1年生から不登校になる生徒がいる。つまり、要因も様々で、学力不振であったり人間関係の不全ばかりでなくて、ご自身の気質の部分であったり家庭の状況であったりと多様になってきている。その生徒に合った取り組みを進めていかないと、なかなか好転していかないという現状がある。そのためには教育委員会としては様々な人材リソースを使って、例えば学校だけじゃない力を借りて、市役所の福祉分野や子育て分野などと連携しながら、子供たちの育ちについて対応している。

(石井コーディネーター)

前回不登校でどういうところに相談できるのかなかなか相談できる場所がなかったという話があった。全国的なことだと思うが、今話があった学校にソーシャルワーカーとか相談員の人がいるような状況にどんどん世の中としては変わっているという状況を知ってもらいながら、中学校の環境をどう少子化に合わせたものに変えていくかを考えるというところに繋がっていくと思いい説明をいただいた。

(委員自由発言)

自分が学生だった戦後は人数を多くいたが、不登校はあまりなかったと思う。いつ頃から、不登校が多くなったのか。仮に不登校であっても社会に出て食べていければいいんじゃないかっていう割り切り方もあると思う。その辺りの歴史を教えて欲しい。

(学校教育課長)

委員の皆さんが学生時代、自分のクラスや学年に不登校の生徒がいたかどうかというのは、振り返っていただけるといいかなと思うが、自分は54歳だが、私が中学校のときは不登校の生徒は何人かはいた。私が教員になったのが平成6年か7年ぐらいだが、そのときも私のクラスに不登校の生徒がいた。担任を何回かしたが、私のクラスにいたときもあれば、隣のクラスにいたっていうときもあった。そう思えば、教育委員会に来て数字を追えるようになって、今私が持っている資料では、平成26年の数字と今の数字では今の方が多いと認識している。先ほども言った通り、平成26年当時は高学年や中学生が多かったが、低学年はいなかった。現状は低学年にも何人かいるというような状況にある。

私のクラスにいた不登校の生徒は、結婚をして仕事もしているという話も聞く。ただ、そういう例もあるし、なかなか仕事に就けないというのものもあるかもしれない。法律が変わって、学校復帰だけを目標にするので

はなく、その後の社会的自立を目指した対応をしていこうというふうに変ってきているので、全員が学校に復帰できるような対応するというわけではなく、将来を見通した対応を南陽市でも進めている。不登校の要因は、1つこれをやったら全部解決するんじゃないかっていうところはなかなかない。それぞれの自分の気質の部分もあるでしょうし、家庭環境の部分もあるだろうし、また学校の中での人間関係なんていうこともある。先生だったり友達だったりっていうのもあるかなというふうに捉えて1個1個に対応が違っているので、学校でいろいろ工夫している。

(石井コーディネーター)

その低年齢化する理由についてよく言われているのは、この20年ぐらい前までは、もう学校に行くか行かないかの1と0だったというところから、首都圏では20年ぐらい前からは民間の居場所みたいなところに通っても、学校の先生が出席扱いにしたり、中学校にいかなくても高校に行けるみたいに変ってきた。それを知っている世代が今親になっているので、子供が小学校に上がるときにちょっと行かなくても、そんなに気にしなくなっている。昔だったら、もう学校行かなかったら、一生終わってしまうのではないかと、そういう悲壮感があって、学校まで連れてって、ちょっと今日は校門にタッチできたから少し進んだとか、今日は教室に入るとか下駄箱まで行けたみたいなことで一喜一憂していた。現在は学校自体が相対化して、学校に必ずしも行か行かなくてもその先の人生が広がって見えてくるというふうに20年ぐらいで状況が変わった。先ほど課長の方からあった法律も、多様な学びを国全体で保障しようというふうに世の中が変わってきたので、中学生になって人間関係で行かなくなるというだけじゃなくて最初か小学校がどうも合わないから行かなくても何とかかなというふうに世の中が変わってきたところはあるのだろう。今20年前の話をしたが、自分がたまたま20年少し前、そういう子供たちと関わる機会があったが、その時の中学生の1人は今、バイトだけしている。片や中学校1日も行ってないけど、東北地方の某有名国立大学に行って、中学校嫌いだった子が、今、大学の先生をやっている。その振れ幅は1人1人違うので、食えている人もギリギリ食えている人まで、それは色々いる。ただ20年前から今までの間でだいぶ世の中の不登校への理解の変化はすごく大きいので、それで年齢が下がったり、人数が増えたり、逆にそれに対して今、説明いただいたような教育委員会としても様々な準備をするというふうに変ったのが、すごく大きい変化だなと思う。

(委員自由発言)

何かあった時、ITとかパソコンを使えば何でも調べられるし、本当に新しい情報がどんどん入ってくるので、考え方も確かにあるなというふうに理解できる。逆に言うと、不登校、自分の時には考えられなかったが、それほど心配しなくてもいい時代になっているんじゃないかなというふうに思う。

(委員自由発言)

不登校はもう珍しいことでもなくなっている。私の娘も4か月ほど不登校だった。ある時突然行かなくなった。しかし、不登校になったからって、周りの環境も変わらず、友達はそのままであった。学校に行っても、別室で給食を食べるが、友達が遊びに来てくれる。周りの友達も不登校の子に対して何の偏見もない。ただ、教室に来ないことをみんなが認めている。そういう世の中になってきたから、別に不登校だからといって何も心配することないんじゃないかなと思う。勉強も何とでもなるし、私は異端かもしれないが不登校かどうかはそんなに重要じゃなくてもいいのかなと思う。学校に行かない選択も含めて、それも多様性の一

つだと思う。

(委員自由発言)

行政の側から見ると、ものすごい扱いづらいのではないかと。行政というかやっぱり一律のところではみんなに伝わっていくのが、一番楽なこと。そういう多様性があるということにどこまで一つ一つ目を配ってやれるかってことはあると思う。そうなったら学校はいらないのかとやっぱり思う。なぜそんな考え方が出来上がってきたかという、やっぱり学べる環境があるということ。それだけが確保されればいいのかと考える。

(委員自由発言)

決して学校に行かないで良いというつもりはない。今、娘も中学校の時は行かなかったが、高校に行ったら変わってすごく部活に打ち込むようになり、それで全国大会に行くくらいになった。副部長もやっている。やっぱり人は変わる。心配しなくていいなとなって、不登校のときのことも思い出の一つになっている。

(委員自由発言)

結果的にそう思えたということか。

(委員自由発言)

その時も単身赴任だったので子供に関われず、だいが妻には苦勞を掛けたと思うが、先生もそのときもとてもいい人だった。私も先生と面談をしたが、無理せずに来なくても、来たいと思った時に来れば良いと言ってくれた、そういう理解のある先生だったのが良かったと思う。

(委員自由発言)

自分同級生で、3人不登校がいたが、1人は学校に来ていた。別室に行っていて、一緒に食事を食べるにいった。今その人は、親のすねかじりと残りの2人は音信不通になっている。やっぱりその環境にちゃんと対応してくれる人たちがいればさっき言ったように、前に進めると思う。ただ、中学校時代はそういうふうと一緒に来ていたけど、結局高校になったら別の高校に行ってしまう。環境がなくなって終わってしまう。娘さんの方で何があったかも知りたい。もしかしたら同じことに当てはまる人もいないんじゃないかと思う。対応方法があれば、解決した人たちもいるはず。そういうものを何か聞ける機会があればいいかなって思う。

(石井コーディネーター)

確かになかなかあんまり聞けるものではないかもしれない。本等で成人した大人が過去の経験を話すことはあるが、若いうちに話すことはあまりない。

(委員自由発言)

私もあえてそれは聞いていないし、個人の自由だと思う。自分が、何があったのかどうしてなのと聞いたら、またおかしくなるかもしれないしそんなことは一切しない。もうそれは子供に任せている。今が良ければそれでいいと思う。今取り組んでいることに親としてはやっぱり支援したい。

(石井コーディネーター)

今の話は、不登校の話も一つ大きな要素ではあったが、幼保小中という15歳までは教育委員会がカバーする幅かもしれないが、どうやって壁といわれるところをどう乗り越えて、成長していくかっていう話が確か前回あった。前回学校のサイズの話があったが、例えば高校のクラスが40人ぐらいというときに40人の集団で、知らない40人の集団の中に入っていくときに、中学校のサイズがどれぐらいだったら、この壁を無理なく超えられていくかという話もあったので話をしてもらった。一般的に幼稚園とか保育園は、20人とか25人ぐらいか。小学校は様々だと思うが、少ない所は1桁ぐらいか。

(学校教育課長)

小学校は少ないところは、学年で5人というところもある。梨郷地区の3年生と4年生は6人と8人で複式学級を編成している。中川小学校は今年度で休校になるが1年生はいない。2年生が4人っていうクラスで勉強している。山形県の中学校1クラスは多くて33人。宮内中学校は1学年が65人っていう、2クラス。赤湯中学校は104人で、4クラスというのがある。

(石井コーディネーター)

正確な数字があるわけではないのでイメージだが、小学校から顔を知ってる25人が、いきなり42人と増えるときのインパクトだったり、4人から25人のインパクトというのは、やっぱりそれなりにあると思う。ギャップはどうしてもあるのでどっかで乗り越えなきゃいけないが、成長のポイントだと思うが、あんまり極端だとやっぱり子供にとっては大変だという話があったので、ちょっとこのギャップの話ももらって、前半は学校教育課長に話をいただきながら、皆さんに共通の現状のベースを作ってご質問いただくって形で進めた。今が全体時間の半分ぐらいなので、10分ほど休憩をして後半は今の内容に捉われず全体的な協議の方にさらに進みたい。

(休憩 10分)

(石井コーディネーター)

後半を再開する。今15時なので、16時15分ぐらいまであと1時間ちょっとの全体協議を続けて、その後最後少しまとめたいと思う。後半に皆さんに考えていただきたいこととして、10年後はどうなっているかということ仮に置くことにした。皆さんそれぞれの10年後があると思う。そこで南陽市の中学校の10年を考えたときに、先ほど3割生徒数が減るといふに言ったが、3割減ると言ってもクラスが30人のうち21人になるというわけではないので、なかなか実感がしにくい。すごく大雑把に沖郷中が179人、赤湯中が238人、宮内中が122人というのを3学年で割ってみた。そうすると、大体沖郷中だと3年生では30人のクラスが2クラス、赤湯中は27、8人が3クラス、宮内中は20人が2クラスになる。中学校がこういった人数になるというのをイメージしていただいて、10年後までに何が課題となるか。先ほどお話いただいた皆さんに共有したことも含めて、何がこの後の10年間の課題で、何をやらなければいけないか、皆さんでアイデアとして持っているのはなにかというのを考えていただく後半時間にしようと思う。10年後の中学生は、どこか違う所からやってくるわけでも、これから生まれるわけでもない。もう既に生まれている子供なので、もう数もほぼ決まっているし、皆さんのご近所にいる子供たちだと思うので、今小学校にも上がってない小さい子供たちが中学校に上がるときに、何を地域としてしたらいいかなというアイデア出

しの時間。先ほど不登校の話題でも、色々な話があったと思うが、それに限らず、部活にも限らず、全体として、10年間の間に、こうだったらいいなというものはあるか。

(委員自由発言)

人が集まるような魅力作りをすればよい。ざっくりで多分大きく枠組み作って、魅力を作って集まってもらう。出て行かなくなるような魅力。学校の魅力。具体的には、前回も言ったような強い部活があれば、別の所からも集まるし、自分もその競技をやっていたら、ここで上手くなったからっていうので、離れなくなったり、もしくは戻ってくるということもある。学校の校風でもよい。スローガンのようなイメージ。

(委員自由発言)

書き方だと思う。人を出て行かなくするのか、人を呼ぶのか。それを学校として考えるのか、自治体として考えるのか。例えば手当がいっぱいだったら残るし、働く環境がいっぱいあったら就職しようという人が出てくる。どんな切り口かということだと思う。

(石井コーディネーター)

この話を考えるのに、この街自体に、例えば1000人の雇用が生まれて、3000人の家族として来るからクラスの人数が増えますというのは、今回のお題から外れてしまう。それをもとに、個々の課題を解決しようっていうのは、ちょっとこの課題解決の方法としてはちょっと無茶だと思う。あくまでもこの中学校どう考えるかっていうところから考えないといけない。魅力作りで結果的に増えたとしても、魅力を作って増やしてからじゃないと中学校の問題が解決しないとなると、今3歳2歳の子供からすると不安定すぎて、可哀想すぎると思う。今の2歳3歳4歳ぐらいの人たちにどういう10年後の環境を作るか、維持するかもよいがそういったところで考えて欲しい。

(同上委員自由発言)

教職員の数は減っていくのか。

(学校教育課長)

教員の数は、法律で定まっていて、学級の数で配置される先生の数が決まっている。私は市の職員だが、任命するのは山形県で、県費負担ということになる。学級数で決まるので、生徒の数が、減ると先生の数も減る。

(石井コーディネーター)

鋭い質問だと思った。例えば宮内中の10年後の6クラスに対して教員が何人という事が決まっている。中学校は全部1人の先生が全教科を教えるわけじゃない。英語があって数学があって、そうすると、6クラスぐらいだと、例えば家庭科の専任の先生はつくのか。

(学校教育課長)

つかないことが想定される。

(石井コーディネーター)

例えばそういうことが起こりうる。クラスが減ると、当然先生はいることはいるけど、そういう意味での専門性みたいなものが失われてくる可能性はある。数学の先生も1人とか2人とか少ない可能性はあると思う。例えば、自分の子供は、この数学の先生のとときは全然駄目だったけど、クラスが変わったり学年が変わったりして、先生が変わったら分かるようになったとか、そういう意味での多様性は、クラスが少ないと失われうる。

(学校教育課長)

標準な規模の学級数が、中学校の場合だと、12学級から18学級、1学年4学級というのが法によって、示されている。これを下回るとクラス替えできなかつたり、1学年に担任の先生以外の学年主任の先生の配置ができなかつたり、免許を持った家庭科の教員がないので、理科の先生が家庭科を持つための特別な免許を出して担う状況になる。生徒の数が減っていくとそういう配置になる可能性が出てくる。

(委員自由発言)

生徒の数によって、生徒が受ける教育の質が変わってくるっていう可能性があるということか。

(石井コーディネーター)

まさにそう。それを国が決めているからその方がいいと考えるか、こじんまり120人で家族みたいで、みんなまでワイワイしてよいと考えるか、その質という意味で、専門で勉強された先生に教えて欲しいと思うかどうか。12から18というのはあくまでも3学年で18なので、学年で4から6。

(同上委員自由発言)

3校あるうちの1校は、少人数の学校は和気あいあいとできる校風で、別の中学校は多いところは、しっかりと質が保たれた校風という風に分けて、選択できるようになれば、行きたい学校を選ぶことができるということもできるのではないか。

(石井コーディネーター)

今の話だと、1校は小さくてもよいとしても、12をクリアするには、どれがどれかを統合しないと、全部が小さくなる。全部小さいと、クラス替えができて、担任以外の配置ができて、免許がある人が教えるということができない。

(委員自由発言)

実際に、知り合いでその免許外で音楽が専門なのに家庭科を教えている先生がいる。専門外の家庭科は自分も学び直す必要があり、先生方の負担もものすごいと聞いた。クラスが少ない、先生方が少ないということは、担任以外の先生も少ないので、中学生時代に自分と関わってくれる大人、先生が少ない。多ければ多いほど、先生によって成績が良くなったとか、数学がわかるようになったということと同じで、色々な大人がいるということ、自分自身も中学校のときあの先生は好きだけどあの先生は苦手だとかあったが、そういうことを学ぶ機会が減ってしまう。子どもにはいろんな人と関わってほしいと思う。社会に出てから、いろんな人と出会うのもいいこともあるとは思いますが、いい人ばかりに出会うとは限らない。段階を踏ん

で、いろんな人がいるんだとか、自分にはいろんな人が関わっていてくれたんだとか、大人になってから思い返せるようにするには、ある程度のクラスがあって、関わる人がそれなりにいてという方が良いと思う。先生としても、同じ教科を担当する先生が他にいるのであれば心強いと思った。なかなか教室に入れない生徒がいたりとかするときに、先生方が少ないということは、その後に関わってくれる先生ももしかしたらいないという状況が生まれてしまうかもしれない。他で同じように学べる場があればいいだろうが、じぶんは学校には行きたいと思っている方がいる場合、その子に関わってくれる先生がやっぱりいて欲しいと思う。ある程度の人数がいて、先生もいてという学校の方が、自分として良いと思う。

(石井コーディネーター)

先生にとっても良い面があるというのは気づかなかった。23歳で大学を出て、美術の先生になってから、全然美術の先生の先輩がいないということは今でも起きている可能性がある。

(委員自由発言)

自分は、最小限に小さい学校からある程度大きい学校まで一通り経験してきたと思う。小学校の時は、同級生が3人しかなくて、複式学級だった。中学校はちょっと大きくなって宮内中で、1学年3クラスで、今の高校は1クラス40人で5クラス。幅広い学校を経験できていると思うが、小さい小学校の時も、先生との関わりが深かったり授業もマンツーマンのような形だったり、とても楽しかったが、高校へ上がっていく中で、初めて会ったような方にたくさん出会ってきた。対応の仕方や喋り方を学んだ。自分の経験にないことがたくさん起こるとそれだけでとても成長できた。それを小さい時に知っているのと知らないのとで生き方が変わってくると思う。できるだけ、小さいうちに、早い段階でそういういろんな人と関われる場とか、いろんなタイプの人と関わったり、いろんなことを経験できる場があることが大事なのかなと思う。

(石井コーディネーター)

逆に今の小さい小規模の複式のようなところでも、学校の先生以外の大人が学校に関わって、その辺を補うという取り組みはやっているのか。

(学校教育課長)

それぞれの学校で特色ある学校運営を校長先生が中心になってやっている。荻小学校では、地域の方が関わって、畑や田んぼであったり、山に行ってワラビを取りに行くのが日常。それが普通で複式学級なので、授業の半分は先生がつかない。自分で学ばなきゃいけない状況で、友達3人で相談して学ばなければいけないというような時間が発生する。先生に指示されなくても、どうするかという相談して決めるという力をつけて、中学校に進んだと思う。逆にサッカーや合唱とか、そういう経験は残念ながらできない。そういう場合は、あえて隣の学校にスクールバスで行って経験するというようなことをしていた。生徒にとってはそれが日常ではなく、ちょっと緊張しながらしているっていうような状況もあったらと思う。

(委員自由発言)

孫が沖郷小学校の1年生。前回の資料を持ち帰って娘と話したが、娘は早く統合してほしいと言っていた。私も年がいつているので、そんな子供を急に大きい学校にポンと入れるっていうことに不安はないのかと思った。そういう話を何日もしたが、娘は、中学生がもうオリンピックに出て金メダルを取る時代なの

で少人数で何も選べないところに自分の子供を行かせるのか、大きくなる学校でいろんな選択肢をいっぱい選べる方が子供にとってはいいんじゃないかと言っていた。自分達のものさしで、子供にはできないんじゃないか、やれなくなるんじゃないかと思ったり、人数が集まらずできないという方が危険じゃないのかと娘はよく言うが、今まさにそうだと思っている。時代はどんどん変わっていくので、子供たちは大きい人数のその社会に出ないといけないので、小さいときからそういうものに慣れさせるっていうことも大事だと思う。登校できなくなったということは、いつの時代でもあったことだと思う。その時に、伸びる子供たちだけに焦点を合わせるのではなく、同時進行でフォローしながら自分のやりたいことをどんどん世界に出ていくような子供たちの才能を伸ばしてあげたい。小学1年生の孫が、足が速くなりたいから技術員がやっている教室に行きたいと言っている。娘も心配したが、すごく教えるのが上手な技術員として子供たちと接していて、今回の運動会でリレーの選手の補欠になって、ものすごく喜んでいて。親が、自分が今まで経験してきたことで測ってしまって、できないんじゃないか、かわいそうなんじゃないかとマイナス面を見てしまっている部分が多いんじゃないかと思った。英才教育をされているんだと思うが、オリンピックに出て自分の力を思いっきり出して伸びてる子供さんもいるので、やっぱり自分大人がここでは駄目なんじゃないかとか、そういうふうに決めてはいけないのではないかと。小規模に向いている生徒はそれはそれでいいと思うが、伸びしろがあるものを小さくしないで伸ばしてあげるということを同時進行でやるのがいいと思う。教師の免許を持っている方のカウンセリングよくある。先生も病んでいる。そういう先生もまた社会に出てやり直したときに、自分は仕事をできなかった期間どうしてそうなったのかっていう経験をしているので、例えば登校できない生徒に接することも自分が体験しているので、そういう方が復帰して、自分たちも経験してきた中で自分が何かちょっと役に立つところがあれば、学校でそういう人が必要だとなれば、一般市民でも、自分がそれを残してあげられるっていうことは、そういうことしかないんじゃないかと思う。だから、例えばカウンセリングをするということができれば、困っている子供さんにちょっと会って話聞いてくれと言われれば経験したことをもとにして話す。そういうことができる人は私以外にいろんな方がいらっしゃると思う。自分は、先様の言うことを聞かなくちゃいけないという親の言いつけを聞いて、熱があっても学校休んでは行けないということもよくあった。そういう時代じゃなくなったので、とにかく子供が主役になって伸びるっていう伸ばしてあげたいっていうそういう気持ちを大人が持てば、まだいろんなものができるんじゃないかなと思う。

(石井コーディネーター)

伸ばすためにはちょっと厳しいとか大きな環境もあるけども、もしもそこにうまくいかないってことがあればちゃんとフォローできる体制を両方作るということ。

(委員自由発言)

子供たちの考えというのが私は一番だと思う。大人がどう思うかではなくて、やっぱり子供たちがどう思うかが一番。大人としては、質の高い教育を受けさせて、子供の将来いろんな選択があるよということを伝えるというのが一番の目的だと思う。よく親に勉強しろと言われてたが、若い人は、その経験がないので理由が分からない。自分も今になって思えば、勉強しておけば違う自分もあったと思うが、そういう経験を若い人に教えてあげるのがよいと思う。自分の時は学校に行きたくないと言えない時代だったが、今は言えるようになっているので。大人の世代もそれに合わせて変わっていかなくちゃいけないと思う。昔の時代も考え方も変わっているから、その焦点をどこに合わせるかっていうことがすごく重要。だからこそ中学

生がどういうふうに思っているのかっていうのが一番かなと思う。

(石井コーディネーター)

日本全体でも新しい法律ができて、子供の当事者の意見をしっかり聞きましょうとなっている。今までは、子供はもう大人の言うことを聞いてればということだったが、当事者の意向、意見というのもとても大きい。ただ難しいのは、今の中学生に聞いたとしても、実際に統合するには、やっぱりかなり時間がかかる。さっき言った10年後中学生になる3歳の子供に、中学校のことを聞いてもそれはまた微妙な話になる。親の世代からすると、自分の子にはこうしたいとか、あるいは祖父母の世代からするとこうなんじゃないかという、世代の違いもあるが、なかなか時間のかかる問題だけに難しい。これが明日どうしようという話であれば、中学生自身に聞くことができるが、10年後は今の中学生だったらもう立派な大人になっている。できる限り近い世代に聞くっていう必要性はありながらも、当事者とは全く違うのが、この問題の難しさだとは思う。3年間で、次から次へと人が変わってしまうので、その時間の移り変わりの難しさは非常にあると思う。

(委員自由発言)

自分は、小学校中学校と家が貧しかったのでヤギを飼っていた。自分の役割は、草を刈ること、餌を準備することだった。そういう役割を与えられた。自分は好きとか嫌いじゃなくて、やっぱりヤギを生かしておかないといけないうことで、風の日もカッパを着て、草刈りをしたという経験がある。当時はその小学校か中学校の時は、それが苦痛ではなかった。当然自分がやるのだというふうに思っていた。でもそういう経験が、今でも自分の生活の基盤になっていて何かあっても逃げない。いわゆる雨が降ったから今日はジムに行くのを辞めたということと言わない。そう自分に言い聞かせている。小学校中学校のときは自分が貧しいとか、貧しくないなってことは考えてない。ある程度、親の方でそういう環境や枠組みをやっぱり与えてあげるといことも必要じゃないかと思う。家庭の状況とか、時代とかによっていろいろ中身は違うと思うが、ベースの考え方は多分間違っていないというふうに思っている。

(石井コーディネーター)

確かに役割っていうのがしっかり与えられるというのは、大事なかもしれない。その年にあった役割が大事。

(委員自由発言)

統合とかはやっぱり嫌だなと思っていた。子どもが高校生になって、色々な地区から子供が来るから大丈夫かなと思ったが、友達ができるのも早くて、子供は子供なりに合わせられると思う。統合は嫌だなと思っていたが、皆さんの意見を聞いてそれもありだなと思った。嫌だと思う理由は、自分の母校がなくなるのが嫌だということ。高校が統合になってなくなるが、今頃になって寂しさがある。中学校もなくなっちゃうとするとちょっとそういう寂しさがさらにある。

(委員自由発言)

中高一貫校というのが、南陽市にあったらいいなと思っている。人が集まる魅力にもなると思っている。東根に1つあるが、学力もどンドン上がっていて、実績もあると感じている。米沢市長も市内に作ると公約

にしているようだ。ぜひ市長、市役所の方に考えていただきたい。赤湯駅近くにあったらやっぱり一番いいなどは思っているので、3つの中学校が1つになるだけでなく、その中高一貫校というものがあつたら、さらに選択肢も広がるし、他の地域からたくさん中学生高校生とその親世代、おじいちゃんおばあちゃんも来ることもあるかもしれない。

(石井コーディネーター)

子供が減るときのいろんな解決方法のいくつかに横に同じ学年を繋げるだけでなく、縦に繋げるっていうのもある。過疎の所では、小中義務教育の9年間を一緒に同じ学校でやっているところもある。そうすると、6歳から15歳まで、本当にすごいタイプの違う人が同じところを歩き来して危ないってこともあるが、中高でも、市町村の教育委員会と都道府県の教育委員会が高校と中学で違うことが多いので、そういう難しさはある。ただ小中よりも部活とかは雰囲気に近いので、あるいは勉強なんかもある教科の担任というのは近いので、そういうメリットが学力とか体力とかそういう意味ではあるだろうというのが一般的かなとは思う。

(学校教育課長)

現在県内には、東桜学館や鶴岡の致道館があり、他の市町村でも検討しているが、本市ではそういった議論はない。義務教育学校、小と中が一緒になっている学校は、現在新庄市にあり、飯豊町もそれをやろうとしているところです。校長先生が1人で1年生から9年生小学校の卒業式がないっていう形。南陽市では、幼保小中一貫ということで、学校は分かれているが、目標を同じようにしてやっていこうということを進めている。中高で県立学校と南陽市立学校の一環についての議論はまだされてない。

(石井コーディネーター)

小学校があつて、中学校があつて、高校があるというのを、1つは小中で繋げようということと、中高で繋げようという議論。ずっと9年間だと中だるみするので、4年生ぐらいで少し最上級生をやってみるとか、5、6年生もちょっと中学生の最上級生だけの立場じゃなくてちょっと下級生じゃないが、中学生に混ぜてみるとか、必ずしも6と3で切らないで、4と2と3で切るとか、あるいはちょっと繋げるとか、そういうのも多分この9年のメリットかもしれない。中高一貫は、どちらかということかなり勉強ができる傾向か。

(学校教育課長)

入学者選抜の入試選考がある。パイの取り合いという印象がある。

(石井コーディネーター)

最近、高校サッカーの世界では、中高一貫でサッカーを6年間で教えるっていう学校が、全国大会に出ている。中学生を地域の中学生を囲い込んで、そのままここに入れて、同じやり方で6年間やった方が、この18歳の全国大会レベルになっていることが結構多い。中学校1年生から高校生では、結構その繋がりがあるので、勉強にしてもスポーツにしても、一つのまとまりとしては優れているっていうのはあるかもしれない。ただ、どうしても市町村と都道府県で差があるので、横浜市なんかは、横浜市の高校があつて、横浜市の小・中学校がそこを繋げるなんていうのはやっている。どちらかというに進学校にその地域の中学校がくっついて、すごく人気が高くなっちゃったりという難しさもある。

(委員自由発言)

良いことか悪いことか、全体的に見たときに、どちらなのかって言われてもちょっとイメージがつかない。ただ、学力の低下とか、1人1人の対応に対応しなくてはならない生徒もすごく増えている中で、マンモス校になったときにそういった子供たちが、置き去りになってしまうかもしれないという心配はある。

(石井コーディネーター)

そこは、前回もあったところで、今日は不登校の話をしていただいた。ただ今日の議論を聞く中で、大きいことが1人1人に目が向かないことになるのかどうかというのが、わかんなくなりました。大きいところの方が専門の相談員がついたり、いろんな大人がいるからいろんな経験もある先生がいたりする可能性は、確率としては高い。しかし、小さい学級の方が、担任の先生から見たら、今日顔色が悪いというのは分かるのではないか。でも、それを受け止める能力が先生にないと合わないかもしれない。その辺の小さい事がきめ細かく1人1人にフォローできるのか。大きい方がいろんな大人がいたり、いろんな専門性があるので、1人1人の多様性に向き合えるのかということも聞いて、自分自身もわからなくなってしまう。前回の話では、大きくなることで、弱っている子供に目が向かないんじゃないかなって思っていたが、皆さんの話を聞いてると、ちょっと一概にそうとも言えないなという気がしてきた。

(学校教育課長)

それを同時にやらなきゃいけないのが行政の役割なんだろうなという考えを持った。学校だけでは解決できない課題でもあるので、地域の方にご協力いただいてボランティアとして見守りしていただいている学校もあったり、さらにそれこそ子育て分野のところから切れ目ない必要な支援を適切にできるようなシステムを形成できているので、それを充実させるために、民間の力を借りるなんてことも場合によっては必要になってくるのかなというふうに思う。それは学校の大小に関わらず、同時にやるってことは重要なかなと思う。

(委員自由意見)

どうしても人手が足りないとか、やっぱりなかなか目が届かないという人的な部分でなかなか大変だという今の状態の話も耳に入ったりもするので、そこは行政で対応をお願いしたいと思う。

(石井コーディネーター)

昔に比べて市民が学校に関われる余白みたいなものは、増えている。先ほどあった農業のことを教えるということだけでなく、前回話が合った例えば部活動の支援に入ることも30年前だったらやっていなかったと思う。学校の事務的な部分だけを支援してくれる人を教育委員会が学校につけたりしていて、教員免許がないと学校に関われないという社会ではなくなっているの、皆さんが何らか中学校に関わる可能性は何か持っているんだと思う。関われる可能性も別に教壇に立たなくてもいいと思うし、何か中学生に関われる可能性というのはある。なので、さっきの話も行政がやるだけじゃなくて個人でも学校に何か皆さんの今までの経験とか知識を生かして、関われる部分が、ひょっとするとあるかもしれない。

(委員自由発言)

今だったら、校長先生とか一般企業の人がやることがあったりする。そうなると会社の運営のようにいろんなことをできるんじゃないかと思う。地域の人に関わるなら、嘱託やボランティアでいろんな人に入ってもらってもよい。今は働けるその期間もどんどん伸びてきて、元気な人だったら、昔、教職員だった方をまた現地で雇用してやるのもある。まだまだ働く人がそういうふうに学校の方に関われば、そういった教職員不足って起きないのではないか。全然教育の質って落とさずにいけるんじゃないかなって思う。頑張ってる働く人はいっぱいいると思うので、そういうも活用したらいいなと思う。

(石井コーディネーター)

自分の地域では先生が足りなくて、65歳で辞める先生はほぼいない。物理的に先生が足りないので、産休とか、あるいはメンタルで休んでいる人もいるので、ベテランがいないと学校が回らない、下手したら校長先生が授業やってるみたいな学校もある。

(学校教育課長)

教員の不足は全国的にニュースで言われているところだが、70歳を超えている方でも講師として学校に関わっていただいている。また先ほどのお話で地域の人材についても、学校運営協議会っていう地域の方が学校の方針に参画するという会を設置しなければいけない制度がある。南陽市も全部の学校に学校教育で地域の方に来ていただいて、校長の方針を承認いただくというような仕組みがある。その場でいろんな意見が出て、学校の課題について話をして、地域の方々に地域としてこういうことができるのではないかなというようなお話から、学校の中にボランティアとして地域の方が来てくださってるなんていうふうになった学校もある。

(委員自由発言)

どんどん要望を行政に出すのも1つの方法だと思うが、逆に自分たちがそこに入ってやるっていうその方法もある。こういうことをしてほしいから願うのではなく、こういうことしたいからやっていってという方向に持っていく。

(石井コーディネーター)

中学生が挨拶しないから学校で教えるというのではなく、あの子たちが挨拶できるようになるには地域でどうやって教えようか、という発想になるということ。

(同上委員自由意見)

それこそ自分ごと化じゃないかと思う。

(委員自由発言)

自分が工業高校で、技術者が足りなくなっている。出ていく人はいても入る人が少ないので、学校でも工業高校で学んでくれているのはありがたいんだって企業の方にも言われる。工業高校とかそういう技術的な方に興味を持つきっかけが中学校とか小学校とかに選択肢が増えるきっかけを持てる場がたくさんあることが大事なのかなと思う。中高一貫校っていうのが出たんですけど、そういう選択肢もすごい大事だ

と思うが、それにばかりクローズアップされてしまうと、勉強やスポーツが強くなる一方で、工業的な学校とかの注目度がどうしても落ちてしまう、少なくなってしまうのかなと思ったので、そういう情報を仕入れたりとか、こういう将来の道もあるんだって知るチャンスを作ったりとか、地域の人も関わってそういう場があると、技術の分野でも重宝されるんじゃないかなと思う。

(石井コーディネーター)

学校にキャリア教育ってのはよく言われるようになって、大学に行って勉強しなさいみたいなことじゃなくて、きちっと目標将来の目標を持ってという風に中学の時からやろうとしている。自分の子供が出た中学校は、体育館の中にブースを作って、保護者がそれぞれの業界の説明をするブースみたい就職模擬就職の説明会みたいなのをやっていた。中学生に様々な職業の実地的な進路の話をしてくれるというものがある。土木のブースがあって、あるいは果実農園だったりというバリエーションからすると、多分そういうキャリア教育はより中学校の方がやりやすいかもしれない。

(学校教育長)

南陽市では職業人講話とか職場体験をやっているので、バリエーションを増やしていければなというふうに思う。何よりもキャリア教育を系統立てて、それぞれ中学校の先生は中学校卒業だけでなく、もっと先を見越しての進路指導と進学指導と、このキャリア教育でしていただいている。

(石井コーディネーター)

自分の地域でも職業体験はやっていて、市役所に行ったり、郵便局に行ったりはするが、体験できるバリエーションと、親の職業のバリエーションが全然違う。どっかのお父さんはコンピュータゲームを作っているが、ゲーム作ってる職場が市内にあるわけじゃないので、職業体験できるわけじゃない。保護者の中でそういう話が聞けるっていうのは、だいが中学生にとっては魅力的だと思う。

(学校教育課長)

ようこそ先輩という感じで、高校生が学校に来るといこともやってるところもある。

(石井コーディネーター)

中学生にとっては、1世代違う50歳のお父さんお母さんたちよりも18歳くらいの人たちの話を聞いた方がモチベーション上がるかもしれない。

(委員自由発言)

インターンもやったりしているし、自分の会社でもうちの会社でもやっぱりそういったときに卒業生を行かせたりしているので、中学校でもやってみても良いと思う。

(委員自由発言)

今まで話した中で、思ったが、製造業ではやるが、魚の骨というのが。頭があって、背骨があって、メリットデメリットと解決法とかの何が駄目なのかっていう話があったらよかったのかと思った。徐々に子供たちと付き合っていくのは徐々にの方がいいんじゃないかというのが、統合することでは、デメリットになる。

でも例えば、自分の方では漆山小学校中学校の廃校になって宮内と統合したが、それはデメリットだが、伝統的なソフトテニス自体は伝統として残っていて、テニスコートも立派なものを作っていたら、そこでも受け継いできた。これはメリット。だからそういうそのメリットデメリット何が駄目なのか、それに対しての解決方法が見えた方がいいかなと思った。

(石井コーディネーター)

整理されていない部分がちょっとあったかもしれない。おっしゃる通りで必ずしも可視化してメリットデメリットだと思ったものが、今おっしゃったように、ひょっとしたら次のところに必ずしもマイナスじゃなくて、プラスに変えられる部分もあるかもしれない。ここまでの議論も含めて、そこは次回の冒頭に少し整理をしたいと思う。自分の中でも整理できてないところ、先ほど話したような、大きいから目が行き届かないとか、不明瞭な話もあるので、そこも含めて整理をして次回提示したい。

(同上委員自由意見)

大きいと目が届かないけども、職員が増やせるかもしれないということもこれに当てはまる。

(委員自由意見)

どちらにせよいいことも悪いことも絶対あるので、それをどっちを取るかっていうのは、受ける側が選択するのか、という形になってくると思う。

(石井コーディネーター)

今まで出ていないデメリットとしては学校が遠くなることが多いと言われる。場所を工夫すれば変わるかもしれないが、一般的にそう言われている。そろそろ終わりが近いので、最後に今日冒頭にお話をした改善提案シート、これをちょっとまだ書いてない方がいらっしゃれば、書いていただきたい。

(委員自由発言)

質問だが、南陽市の小中には海外の方はいるのか。そういった方のケアはどのようなことをしているのか。生徒は日本語を話せるのか。環境に馴染んでいるのか。

(学校教育課長)

数名はいる。国籍が日本でない方には、日本語で関わるような時間を設けて、対応している。日本語を喋るのが得意でない人もいますので、付き添う人を雇って授業の中ではずっとつける時間を設けてやっている。その子が馴染めていないということは今のところない。

(同上委員自由発言)

私の住んでいる地域ではとても多い。自動車関係の会社があるので、子供の小学校で700人ちょっといたが、色んな国の子がいた。皆日本語を話すので、親の通訳もする。そういう環境になっているので、子供たちが海外の人に全く偏見がない。それをとてもよいと思っている。

(学校教育課長)

教科書の挿絵がもう既に肌の色違う方だったり、車椅子の方だったりしている。南陽市には、そんなにいっぱいいるわけではない。

(同上委員自由発言)

子どもたちに偏見がなくて、不登校の子供も受け入れてくれたのもありがたかった。これからは違う人を排除する風にはならないのだと思う。

(石井コーディネーター)

地域の差が激しいのだと思う。同じ県内でも、すごく地域によってバラバラで、同じ市町村の中でも学校によって違ったりもする。南陽高校市役所部の方に参加いただいたので感想をいただきたい。

(南陽高校市役所部)

自分たちは最近まで中学生だった人もいたりして、いろんな自分の中学校のことを考えながら聞いていたと思う。皆さんの様々な意見を聞いて、自分だったらどうしようかなとたくさん考えて、中高一貫校の話の聞いてよかった。私達の市役所部の活動にも、皆様の意見を生かしていきたいなと考えている。

(南陽高校市役所部)

最近まで中学生だったが、このような場に来て、中学校のときには思いもしなかったようなことや、少子化が始まっている話やそれぞれの学校への人数を増やしていきたいといろんなアイデアを学べた。こういう話し合いの場で、課題やそれに対する解決方法もいろいろ学べたので、これを生かして南陽高校市役所部の活動に生かしたいと思う。

(石井コーディネーター)

次回も、基本的には今日のようなスタイルをもう一度、もうとにかくたくさんブドウの粒というか、アイデアを出すという事をしたい。最後に指摘のあった、統合のメリットデメリットがちょっとまだはっきり見えてこないというのも、そのあたり、次回の最初に話したいと思う。皆さんも、ご家庭やご近所で話を聞ける人がいれば少し意見を聞いてきていただいて、次回に反映させてもらえばというふうに思う。

(全体協議終了)